

動物生態学者と ロックシンガー、 椎の実を食べる。

対談 白井 貴子 × 岸 由二

企画構成・乙益由美子
photo by 寺島由里佳



小さいころは理屈めきで

【岸】ぼくは、最近、都市型兼業採集狩猟民と自称しています。兼業農家というと、農業をやっているけれど現金収入は会社員や公務員、という場合をいいますね。ぼくは三歳のころから都市の中で採集狩猟をしていて、今も採集狩猟民。草を集めたり虫を採ったり魚を採ったりして、現金収入は大学の先生などで得ている。だから、都市型兼業採集狩猟民。

このあいだ翻訳出版した『足もとの自然から始めよう』の著者のデイビッド・ソベルは日本ではあまり知られていませんが、アメリカで、環境教育の見直しのすべての動きの思想的な中心にいる人物です。通常、環境教育というと、一年でも早く地球温暖化の理屈を覚えさせること、熱帯雨林の破壊を知らせ、子どもが小さいうちに氷が溶けかかって死にそうなシロクマの写真を見せることになっていきます。

ところが、ソベルの環境教育の原則によれば、小学校五年生くらいまで、環境危機の話題を子どもたちの環境教育の材料にすることは禁じられている。これに本気で取り組まないと、理屈はいつばい知っていても

地球のことはちっとも好きじゃない人ばかりつくってしまふ。世界中でそうなのです。地球は守らなくちゃいけない。でも、地球は不安なもの、こわいもの。これでは嫌いになります。

【白井】先生が翻訳されたこの本のはじめにあるように、学校の授業で、子どもたちが小さいうちから病んだ地球の絵を描かされて環境学習するのはかわいそうだと、つねづね思っていました。私も子どもたちが大地上で遊ぶ時間をたくさんつくってあげること、大人はもっと努力しなければならぬのではないかと言い続けてきましたから、拍手をしながら読ませていただきました。

小学生のころ湘南っ子で、江ノ島の近くの海水浴場で泳いでいました。夏の生ぬるい温度の海しか知らなかつたものだから、夏休みに丹沢の親戚の家に遊びに行つて、ぼんと川に飛びこんだときの、水の冷たさと美しさと深さ。ほんとにびっくりしました。その感動は忘れられないものです。身体にすりこまれたという感じでした。たとえば、単純にそういう経験を子どもたちにさせてあげたいという気持ちがあります。

野生の生きもの

幼いころは、横浜の鶴見のこの上もなく密集した街なかの、埋め立て地の铸件工場に家があり、そこで育ちました。まったく自然なんかいないところで、まわりは空爆のあとばかり。そのすつ飛んだコンクリートの瓦礫がぼくの遊び場でした。瓦礫をひっくり返すとダンゴムシがいたりする。それを一生懸命集めた。小さいころは大人がすばらしいと思うような自然なんていらぬのです。アリンコで十分。そういうものと親しく自由に遊ぶ時間が保障されていれば、ぼくみたいになる。

ぼくはハサミムシとゴミムシとダンゴムシとヤスデと、そんなものどしかに遊んでいなかった。二歳か三歳くらいのとき、アリンコといつも遊べるように砂糖のおびを畳につくった。ねらいどおりアリンコはきたのですが、母には怒られました(笑)。でも、この子から虫を取ったら生きていけないと母はわかっていたのでしょうね、それ以来怒られたことはありません。今もクワガタを四匹飼っていますよ。

先生はダンゴムシを好きだったか

もしれませんが、私はダンゴムシがとにかく好きでした(笑)。トイレの近くにドクダミがいっぱい生えていて、触ろうとするとそこにダンゴムシがいて嫌だった。でも今はその嫌だったという体験がよかったと思います。嫌だったと思うような、そういう体験を今の子どもたちは持つていないのが残念です。

ぼくは野生のダンゴムシやハサミムシを友だちとして育ててしまったのですが、ふつうは野生の生きものではなくて、ペットが友だち。でも、やっぱりペットだけでなく、野生の草も生きものも友だちにするほうがいいですね。子どもが小さいとき、とくに幼稚園から小学校三年くらいまでは、とにかく「かわいい」「おもしろい」で生きものと遊ぶのがいい。

私はペットとしては犬もウサギも飼いました。野生の生きものといえど、藤沢の自然がたくさんある中で育っていますから、夏休みには、前日から木の幹に蜜をつけて、次の日の早朝に行つてクワガタやカブトムシを採っていました。「いたいっ！」という感動が好きです。

小学校に行くとき、親には森を迂

回して学校へ行くように言われていたのですが、森を抜けて田んぼを抜ける近道を通っていました。学校の帰りは田んぼで遊んでから帰るんです。ザリガニを採るために腕を深く田んぼに突っこんで、それこそここまで突っこんだら採れるかというくらいに、こーんなに腕を入れるんです。ほんとに、ほっぺが田んぼに付くくらいまで。

ほくもやりました。冬の田んぼの入口に、もこもことおはぎみたい泥がこんもりしているところをはがすと穴があいている。この穴が深い。間違えると手を挟まれるわけです。痛くて「ぎよえー」です(笑)。爪をつかまえたなら勝ちだった。

そうそう！

ほくは、ザリガニを採るとなると一〇〇匹くらい、カニも一〇〇匹くらい採りました。小学校三年生くらいだと採集狩猟本能で採るから、バケツにクワ、シャベルも持って、みんなを出かけた。今もその採集狩猟が続いていて、先日鶴見川でアユを採って鶴見川流域センターという国土交通省の施設の水槽に入れるのに、若い人に任せたらと言われたの

ですが、自分でもしっかり一匹、投網をなげてアユを採りました。採集狩猟活動をするのが一番楽しい。

採るのって楽しいですよ。男の子みたいに、飼って観察するという楽しみはなかったけれど採るのが好きでした。ギンナンなど清水できれいにして持ち帰ったり、ツクシは煮るとおいしいというので、集めてきれいに袴をとったりしました。

🔥 椎の実の味!?

自然に親しむことを大切にしたいという気持が高じて伊豆に森を買いました。その森で、子どものころと同じ体験ができるのがすごくうれしーし、子どものころでできなかったことができるようになることもうれしーいですね。今、凝っているのは森に落ちてくる椎の実を拾って食べることです。

落ちた直後の椎の実、甘みがあつて、しかも粉っぽくなくて、おいしい。椎の実の木によって味がちがいます。子どものころ、まず「おいしいのはこの木」と習う。十月過ぎて霜が降りるようなころに、その木の下で落ち葉を掘って椎の実を集



めてきれいにして家に帰る。家は鶴見の鋳物工場だったから、だるまストープがあつて、その上で炒っていると、おじいちゃんから兄弟から家族がみんなきて、夜十時ころまでおいしいおいしいと食べるんです。

いいですねえ。木で味がちがうのですか。今度試してみます(笑)。幼稚園のころ福岡に住んでいて、お寺の幼稚園に通っていたのですが、そのお寺の山門に椎の実を炒って売っているおじさんがいました。いい匂いがするから食べたいと思っただけで、買ってもらえなかった。それで一回食べてみたいとずつとどこかで思っていたのでしょう。あるとき食べられなかった椎の実だという感動と、炒った匂いで、記憶がよみがえってきました。福岡には椎の実を食べる習慣があるのですね。

福岡だけでなく、関西には椎の実を食べる習慣があります。京都ではお祭りや椎の実を炒ったものを袋に入れて売るとありますよ。慶応大学の岸研究室でも食べる習慣があります(笑)。

今から六五〇〇年くらい前は「縄文海進」といって、この家の屋根くらいの高さまで海面でした。それか

らまた少しずつ寒くなって今になっています。その間、一万年くらい前から現在まで、ドングリという広い意味でカシ、ナラ、シイの実のことを言いますが、ほとんどの人類が一時期ドングリを食べていたという説があります。人類はごくごくふううにドングリを食べていた。豊かになつてきたから食べなくなつてきただけで、ほくに言わせれば椎の実を食べる文化は、太古の食文化の延長ですね。

いったん椎の実の味をおいしく体験したら、都内の公園の隅にいっぱい落ちている椎の実を見たらほんとに食べたくなって(笑)。落ちてくる椎の実をそのまま食べるということが快感です。

🔥 地球と遊ぶ

先ほど白井さんが言われた、小さいころダンゴムシやミミズが嫌いだったこと。フイビア(好き)とフオビア(嫌い)は、根がいつしよです。強い関心を持つから好きになつたり嫌いになつたりする。まず、関心を持たなければ好きも嫌いもない。だから好きは大好きになるし、大嫌いは大好きになる。